今月の窓

森林と林業・山村
――国家百年の計――

日本の森を，ふたたび野生動物の棲める豊かな森に戻したい。そんな思いで長野県黒姫に小さな森を買い，再生活動に取り組んでいる人物がいる。C.W.ニコル氏である。テレビ，新聞，雑誌等でときおり顔を出すのでご存じの方も多いと思う。昨（05）年12月，ニコル氏の活動を支援している人々のささやかな集いが東京で開催され，そこで私はニコル氏の話を直接うかがう機会を得た。ニコル氏の話はすべて印象深いものであったが，ひとつだけ紹介させていただけば，「日本の森林は世界に類を見ないほど美しく，貴重なものである」ということである。世界中の自然を身近に見てきたニコル氏の言葉には十分すぎるほどの重みがあった。

日本は世界的な多雨地帯であり，西日本中心の照葉樹林，東日本中心の落葉樹林，北海道の亜寒帯，沖縄の亜熱帯樹林など，世界でも稀有（けう）な豊かな植生分布を元来は持っていた。このような風土的背景のなかで，日本の文化や日本人のメンタリティーがはぐくまれ，今日の日本と日本人が形成されてきた。山と対峙（たいじ）するときある種の畏敬（いけい）の念を抱く日本人は少なくないのではないか。山や森林への親しみと畏怖（いふ）を多くの日本人が共有しているように思われる。山や森林は日本文化の基盤といえるものであり，人々の関心も高い。

ところが，日本の林業のことになると，多くの人の関心は薄れる。日常生活のなかで農業が話題に上がることはあっても，林業が話題にのぼることは極めて少ない。

「木が育つには60年はかかる。わしが木を植えるのは孫の世代のためだ」。36年前，岩手県の山深い村で古老が語ってくれた話を今も思い出すときがある。１年１年が勝負の農業と60年かけて育てる林業では時間の刻みが違う。それまでそういう刻みで物事を考えたことがなかった若僧の私には，古老の言葉が妙に心に響いた。

しかし，本号田中論文で詳細にふれられているように，日本の森林・林業は“まさに存亡の危機”にある。木材価格の下落，木材生産業としての林業の採算の悪化，林業の担い手問題，製材業等木材産業の衰退，拡大造林による自然林の人工林化，国や自治体の財政難に伴う補助や支援の減少など問題は山積している。

林業や山村が衰退することは森林が荒廃することであり，森林が荒廃することは林業や山村が衰退することである。我々は長期的なビジョンと現実的な方法論をもって子々孫々に至るまでこの日本の貴重な自然資産を引き継いでいかなければならない。田中論文では改革の方向性として，まず，森林・林業問題を単に森林所有者の経営問題や「業」の問題とするのではなく，広く国民に共通する問題としてとらえなおす必要性を説いている。そして，林業政策という産業政策から森林総合政策への転換，森林は木材生産のための私的財という認識から多面的機能を発揮する公共財という認識への切り換え，人工単一樹種針葉樹単層林だけでなく自然林・混交林・複層林も合わせて形成すること，さらに，野生生物の生息・生地を守る営みを優先させる森林地域の確保，国産材の利用拡大など示唆に富む提言とヒントが整理された形で提示されている。国家百年の計を考えるつもりで，じっくりと腰を据えて論文を読んでいただきたいと願っている。

（（株）農林中金総合研究所取締役調査第一部長　鈴木利徳・すずきとしのり**）**